

# ぽたいたい!

源流のひとしづく

## ぽたいたい

源流のひとしづく

夏  
第21号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館  
発行日 ■ 平成23年7月発行

TEL 0746-52-0888

### CONTENTS

- ・辻谷達雄館長勇退インタビュー
- ・源流の主役たち
- ・吉野川・紀の川流域の遺跡 その9
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・もりみず探検隊

### 森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL 0746-52-0888  
FAX 0746-52-0388  
URL <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

## コケをしらべよう

4月29日に吉野川紀の川しらべ隊「コケをしらべよう」吉野山なのに花見ではなく、苔見をしよう」を開催しました。今回は、桜の名所、吉野山でコケを観察しました。参加者は11名で、近鉄吉野駅に13時に集合した後、植物学上のコケ、コケとコケではないものの違いやルーペの使い方をじっくりと学んだ後、観察を行いました。しかし、小さな生き物を観



▲ ハリガネコケ  
胞子体がたぐされ出ていて楽しませてくれました



▲ ジャゴケ腹鱗片  
ジャゴケも裏面は鱗片状の腹鱗片という器官が見られます



▲ タマゴケ  
コケ界のアイドル!!



▲ オドリコソウ  
見ることが少なくなったオドリコソウですが、たぐされ咲いていました



▲ ナガバチチレコケ  
コンクリートにバッチ状の固まりも作っていました



▲ カキドオシ  
垣根も通ってしまうほど旺盛に成長するので「垣通し」と言います。子どものかんの虫に効く薬草としても有名です



▲ フタバネゼニコケ  
刺繍など望んだところによく見つかりました



▲ 観察の様子  
ルーペを使ってこいねいに観察しました

察していると、全然前へ進めません。結局、3時間ほどかけて、七曲がりの最初のヘアピンカーブまでしか行けず、距離にして200メートルぐらいの観察でタイムオーバーとなりました。ゴケ、スズゴケ、コダマゴケ、サヤゴケ、エゾヒラゴケ、カラヤステゴケなど数種が見られました。この結果は、大気汚染と樹木に着生するコケの関係を調べた Taoda (1972) を参考にすると、亜硫酸ガス濃度で0.001ppm以下であることが推察され、吉野山周辺が、良

好な大気環境であることが推察されました。吉野山周辺では桜の花はほぼ終わっていましたが、足下ではコケ以外にもシヤク、カキドオシ、オドリコソウなど花々が満開で、私たちを楽しませてくれました。(引用文献) Taoda, H. 1972. Mapping of atmospheric pollution in Tokyo based upon epiphytic bryophytes. Jap. J. Ecol. 22(3): 125-133.

## 源流人会募集中!

源流人とはかけがえのない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

とともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,000円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

## もりもり 水源地の森守募金にご協力ください

お寄せいただいた募金は、水源環境向上の一環として、斜面崩壊地での土砂流出防止の木柵設置事業「芽吹きの岩プロジェクト」などに役立てます。

毎年9月の第2日曜日は「水源地の森守募金」の日。「水源地」を守り伝えてゆくための活動を盛上げてゆきましょう。組み立て式の募金箱を配布しています。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

# 辻谷達雄館長勇退インタビュー



平成14年4月、「森と水の源流館」の開館から館長として、さまざまな活動を展開してきた辻谷達雄さんが2011年3月末日をもって館長を勇退されました。今後は森と水の源流館の活動指導顧問、通称「源流学師範」として、山をフィールドに、肌で感じる「源流学」を伝えていきたいと話すが辻谷さんにお話をうかがいました。

「長年にわたる館長のお仕事、お疲れさまでした。今のお気持ちをお聞かせください。」

振り返ればあつという間の10年だった。館長という仕事を退いたものの、川上村に対しても、森と水の源流館に対しても「思い」はおんなじ。

館長として、シンポジウムやいろいろなイベントに行つて「山」の話をしてきた。けれどもそれよりもっと大事なことは、山の中で子どもたちや町の人たちに山や自然の話をする事。百聞は一見に如かず」という言葉があるが、あの言葉には続きがあった。百聞は一見に如かず、百見は一行に如かず」といって、百回、聞くより一回見る方が大事やし、

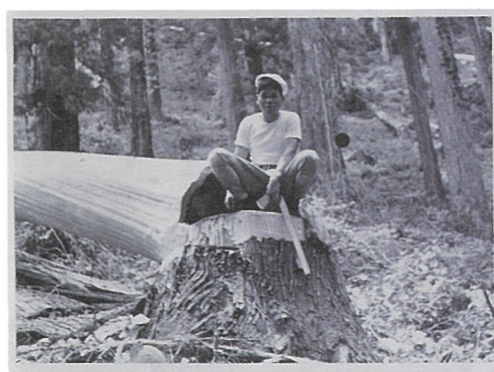
それ以上に百回見るより一回の体験に勝るものはない。シンポジウムなどの会場で、なんぼ話を聞いてもらうよりか、山の中に入って話を聞いた方が何が大事なのかを肌で実感することができる。それをやっていきたいんや。

「10年にわたって手塩にかけて育ててきた源流館ですが、いろいろな苦勞もあつたと思います。」

森と水の源流館は、展示物から山を感じてもらおうようになっていたが、やはり活動の主流は「山」。川上村は、三之公の天然林約740haを買つて水を守っているが、その源流



▲ 約300年の人工林の中で



▲ 青年時代

水を守る活動をしているのが源流館。三之公はブナやモミ、トガサワラなど貴重な原生林と人工林があり、そして吉野川の源流の山でもある。その上南朝の歴史もあり、何もかもがやつていけるフィールド。あれほど優れた場所はほかにない。けれど、自然そのものの山だからこそ、大きな台風が来れば土砂崩れで道路が寸断されることがある。せつかくきれいに土砂をとつて通れるようになったのにもかかわらず、3日目におんなじように土砂で埋まつてしまつた時なんか、ほんまに情けなかつた。自然のなす技とはいへ、こんなんでもこたれてはあかんと思ひ、どんな時も何とか乗り切つてきたし、やはり三之公を守つてい

きたい。自然とはほんまに偉大なもので、人間の力ではどないしようもないことを感じる。よう自然と共生といわれるけど、共生ではないなあと思う。江戸時代から明治に変わると人間は文明開化が進み、自然の上に立つて自然を押しさえつしようとしていた。科学は大事やけど、本当の共生というのは難しいことや。だけど山に入つたら、自ずと分かることはある。だからこそ、自然と町の人のパイプ役として、わしや、源流館があるんや。

「三之公に尽きるんですね。」

いろいろな所で檜の木が枯れる病気が流行つたとき、「三之公は大丈夫か」とすぐ現場に走つた。居てもたつてもおられへん。天然林と人工林がある三之公は、もちろん人工林は手



▲ 大好物のマムシを捕つて満面

## 吉野川紀の川上へ隊

### もくもく探検隊

3月12日、まだまだ寒いなか、8人の参加者で開催しました。講師に伊藤ふくおさん(昆虫生態写真家)、古山曉さん(和歌山大学・大学院)を迎えて、冬越しをしてきた虫を観察しました。冬越し自体を観察するには少し暖かすぎるといふことでしたが、目覚め始めた虫を数多く発見することができました。



▲ 何か見つけた!



▲ ジンガサハムシ



▲ アケビコノハ

ケビコノハが見つかったのを皮切りに、クモの巣、ハチの巣など、いろんな虫やその痕跡が見つかりました。当日はゲーム形式で虫を探すとついで、点数表を使つて見つけた虫の種類に応じて、加減していくようにしました。特に、参加した子どもたちは次から次へと虫を見つけて、講師のお二人をあつちこつちに引つ張つて虫の名前を聞いていました。

またこの観察会では、新しい発見もありました。主にヒルガオの葉を食べるジンガサハムシというハムシの仲間が、ツクシシヤクナゲの葉の裏に大量に付いているのが発見されました。シヤクナゲ類の葉を食べる記録はないそうなので、うれしい発見となりました。



▲ オオコバササミ



▲ ヨコズナササガメ



▲ オオトビササガメ



▲ ヤマトシロアリ



▲ ヒメアカホシテントウ

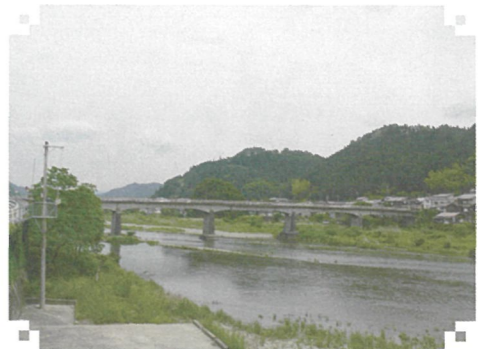
# 吉野川・紀の川流域の遺跡～その9～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

## 絵葉書で見る吉野 ～柳の渡し～

戦前の吉野山では、実に多種多様な観光絵葉書が作られていました。それらが題材としているのは、ほとんど蔵王堂・吉野神宮・後醍醐天皇陵・吉野山の桜などですが、「柳の渡し」・「六田の渡し」または「美吉野橋」といった橋や渡し場が無視できないほど多く取り上げられています。

現在、吉野山に登るには、近鉄吉野駅で下車してロープウェイを使うのが一般的ですが、かつては吉野川対岸の大淀町北六田で駅を降りて、徒歩で吉野山に登る道が使われていました。この道は金峯山寺を復興した理源大師聖宝（832～909年）が整備したとされる本来の参詣路で、その際に吉野川を渡った場所が「柳の渡し」でした。



▲ 現在の柳の渡し（美吉野橋）

天文22年(1553年)3月、吉野を訪れた三條西公條(1487～1563年)は、『吉野詣記』（『群書類従』紀行部）の中で「柳の渡し」の事を次のように記しています。

『五日よしのに赴きけり。これより宗見もともなひけり。六田の淀橋ありけるが、中絶えて修理せし折節にて、けふは船にて渡りぬ。大きな樹をつくりこめたる旅店あり。あるじのいふやう、此の木はいはれある木なるよし申せしかば、六田の淀の柳にてはなきかと申しかければ、其の事にてあるよし申す。みれば又あまた柳ども、いまださむくて、めもはらざる木どもなり。ここにて人々水あみなどしけり。』

「柳の渡し」には「六田の淀の柳」という有名な柳があり、その柳を建物の中に取り込んで建てられた店が、旅人相手に商売していた様子が記されています。

さて、次の2枚はいずれも「柳の渡し」の写真です。

①は明治40年4月～明治42年4月18日(1907～1909年)の間に製作された絵葉書で橋が写っています。一方、②は大正8年(1919年)頃と思われる写真ですが、橋の姿はなく、代わりに渡し船で川を渡る様子が写っています。

橋があつたりなかつたりするのは、大正9年(1920年)に美吉野橋が架けられる以前は、水量が減る冬場と桜を見に来る人の多い時期には仮設の橋を架け、水量が増える夏から秋にかけての時期には渡し舟が運行されることになっていたからです。

3月5日に吉野を訪れた三條西公條も、本来は仮設の橋を渡る予定でしたが、橋が修理中であつたため渡し船を使ったと記しています。

②の渡し船には乗客以外に人力車が載っているのがわかります。近鉄六田駅(当時の名前は吉野駅)が鉄道の終点の頃(1912～1928年)には、駅周辺に観光客相手の人力車が38台も営業していたそうです。ここに写っている人力車も観光客を乗せて吉野山に行った帰りかかもしれません。

また「柳の渡し」は大峯奥駈道に75カ所ある修行場(麿)の一つでもあり、大峯山に向かう人が身を清める場所でもありました。前掲の『吉野詣記』の「ここにて人々水あみなどしけり」という一文は、吉野川で身を清めている様子を記したものです。三條西公條がこの地を訪れたのは旧暦3月、現在の暦で4月頃、柳の芽も出ていなかったとのことですので、身を清めていた人たちは相当寒かったことでしょう。



▲ ① 仮設の橋



▲ ② 渡し船



▲ ③ ②の拡大

このように昔から「柳の渡し」は吉野山・大峯山の表玄関、修行の場として重要な場所であつたからこそ、吉野の観光名所として絵葉書にも取り上げられていたのです。

### 参考文献

- 『大淀村風俗誌』 1915 (奈良県立図書情報館蔵)
- 『吉野詣記』(名著普及会 『新校群書類従』復刻版 1977)

をかけたといけませんが、天然林は人間の手を加えるものではない。木が倒れたら、次の世代を担う木がまた自然と生えてくる。人間が見守つてあげることが大事だが、病気になるたたら、人間がしないといけないことがある。そのときは、大丈夫だったからほっとしたけど、何百年続く三之公の源流の森は守つていくためには見守り続けることが必要。その中であらためて、人間というのは自然に守られて生きていくことを知る。

「そういう体験が、森と水の源流館が進めている「源流学」という学問なんです。」

源流学とは、難しい学問でも何でもなく、源流を通して人と自然の役割について考え、行動し、その体験の中から1人1人が答えを見つけ出していくこと。体験を通じて、感じたり考えたりすることが大事で、源流での体験は、私たち現代社会で失ってしまったものや見失いそうになつていくものを教えてくれる。たとえば、昔ながらの山村の生き方には、生きるための力、知恵や技を学ぶことができる。

もちろん学校でも「生きる力」という言葉を教えているけれど、生きるって本当に大変なこと。町のマンションで住んでいたら、暑くても寒



▲ 源流学の森づくりの指導をする辻谷さん

くても冷暖房は完備だし、お金さえ出せば何でも買うことができる。何もしないで暮らすことができる。でも人間いつどこで何があるか分からない。そういう危険に遭遇したとき、冷静に判断して、それを克服しているか。それが本当の「生きる力」である。山には食べる物ものも薬もあれば、反対に毒になるものもある。自然を知ることが「生きる」ことにつながっていくといつても過言でない。「源流学」は大事な学問。どんな時代にも「生きていく力」を伝えてくれる学問である。後世にずっと伝えていきたい。残していくのがわしの使命やと思う。

「ありがとうございます。今後、さらなる活躍をご祈念しています。」

(聞き手：西久保智美)

## プロフィール

### つじたにたつお 辻谷達雄



1933年(昭和8年)7月1日、日本三大美林のひとつ、吉野杉の中心地、奈良県吉野郡川上村に生まれる。地元の小・中学校を卒業後、15歳で山仕事に従事する。1971年に独立し、林業請負業「ヤマツ産業有限会社」を設立し、ユニークな経営方針で知られる。「林業不況」に抗して都会からの山仕事希望者にも就職の門戸を広げ、林業後継者の育成にも力を入れている。また自然観察指導員として都会の自然愛好家とのパイプ役となる活動への要望が年々高まり、自身で主宰する「山の学校 達っちゃんクラブ」は、今年(2011年)で14年目を迎えている。森と水の

源流館では、これまで館長として都会の人々に、山で生きる技と知恵を体験とともに伝えてきた。今年度からは森と水の源流館活動指導顧問(通称「源流学師範」)として、引き続き活動を行う。著書に『山が学校だった』(洋泉社)がある。

- 2002年(平成14年)「緑化功労者農林水産大臣賞」受賞
- 2005年(平成17年)「緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞」受賞
- 2009年(平成21年)「森の名手・名人100人」認定

# 第10回 源流の主要たち



## 飛べない昆虫

朝倉 和紀  
(環境省吉野自然保護官事務所 アクティブ・レンジャー)

### I. オサムシって何?

皆さんは、「オサムシ」という昆虫をご存じでしょうか？オサムシは、オサムシ科オサムシ亜科に分類され、大きさは10mmから60mmと種によって差があり、ミミズや他の昆虫、カタツムリなどを食べる肉食性の昆虫(コウチュウの仲間)です。オサムシはカブトムシやクワガタムシなどに比べ、目立つ昆虫ではありません。なぜならば、夜行性で昼間は落ち葉や石の下に潜んでいるからです。ときどき、日中、活動している個体を見かけることがありますが、基本的には夜、活発に動き回ります。また、後翅(コウチュウの仲間では薄い膜状で、飛び時に羽ばたく翅)が退化しており、飛ぶことができず、歩き回ることしかできないのです。オサムシの仲間は世界中に分布していますが、そのほとんどは飛ぶことができません。「オサムシ」は、漢名では「歩行虫」、英名では「Ground beetle」など、各国の呼び名にその特徴を知ることができるものもあります。日本に生息しているオサムシの仲間も、ほとんどの種は飛ぶことができません。夜の闇の中で地面をウロウロするだけなので、人目に付く機会がとて少なく、あまり知られていないのです。



▲ ヤコンオサムシ

### II. オサムシと出会ってみよう!

では、どうすればオサムシと出会えるのでしょうか？答えは、「トラップ(ワナ)を使う」です。「トラップ」といっても、大がかりなものではなく、皆さんの身近にある紙コップやプラスチックコップを使います。このコップの口が地面の高さと同じになるまで埋めるだけで、立派な「トラップ」の完成です。歩き回るだけのオサムシは、この落とし穴式のトラップに落ちてしまいます。オサムシの特徴を利用したトラップです。これだけでも十分オサムシに出会える可能性がありますが、コップの底にエサを入れておびき寄せるとより効果的です。入れるエサは、釣りで使うサナギ粉や酢、ビール、カルピスなどなど・・・人によって使うものが異なるので、いろいろなものを入れて試してみると面白いでしょう。このトラップをオサムシが活動している春から初夏、晩夏から秋に森の中や森のはずれ、河原に埋めて数日待てば、オサムシに出会うことができるでしょう。ちなみに、コップを埋めただけのものを「ピットフォールトラップ」、エサを入れたものを「ベイトトラップ」といいます。

トラップを設置するにあたって、守ってほしいことがあります。それは、「設置したまま放置しないこと」です。オサムシをはじめとする昆虫は、一度トラップに落ちると簡単に脱出することができません。放置してしまうと、次々にトラップに落ちてしまい、たくさんの昆虫を殺してしまうこととなります。一度設置したトラップは、全部回収するようにしましょう。

### III. オサムシはおもしろい?

このオサムシの特徴のひとつ、「飛べずに歩き回るだけ」というところが、この昆虫の面白いところでもあります。「飛べない」ということは、チョウやトンボなど飛べる昆虫に比べて、行動範囲が狭いことを意味しています。大きな川や大きな谷、山など、歩行によって横断不可能な障害が生じると、その両側に残された個体群はそれぞれ隔離されてしまいます。隔離されたまま長い年月を経ると、その地域で生きていくのに適した形態になるなど、独自の進化を遂げ、亜種やまったくの別種となる可能性が出てくるのです。日本に生息するオサムシの仲間は約45種ですが、何と180種以上もの亜種に分かれているのです。大きな山や川を一つ越えることで、別種や亜種に出会える可能性があるのがオサムシの面白さでもあるのです。

### IV. いろいろなオサムシ

近畿地方を中心に、北陸地方南部から中国地方の平地では、ヤコンオサムシ(*Carabus yaconinus*)が広く分布しています。このオサムシは、前翅の縁がわずかに緑や銅色をしています。近畿地方中央部に分布するイワフキオサムシ(*Carabus iwawakianus*)の亜種で、紀伊半島の名前がつけられているキイオサムシ(*Carabus iwawakianus kiiensis*)は、川上村や天川村など紀伊半島南部のみに生息し、体全体が明るめの銅色をしています。本州には黒や銅色など地味な色をした種が多く生息していますが、北海道には赤や緑、青などの金属光沢があり、「歩く宝石」と言われるほど美しいオオルリオサムシ(*Acoptolabrus gehinii*)やアイヌキンオサムシ(*Megodontus kolbei*)などが生息しています。

オサムシの仲間のマイマイカブリ(*Damaster blaptoides*)は、日本にしか生息していない種(日本特産種)で、北海道から屋久島まで日本中に分布しています。「マイマイカブリ」としては単一の種なのですが、地域によって8から9の亜種に分けられています。マイマイカブリも他のオサムシと同様に後翅が退化しており、それだけではなく、左右の翅が癒着し、開くことすらできないのです。歩き回ることしかできないマイマイカブリですが、日本産オサムシの中でひと際大きく、木登りをも得意とし、カブトムシと並んで樹液を舐めていることもあります。

マイマイカブリは、マイマイ(カタツムリ)を主なエサとして生活しており、頭部と胸部が細長く、マイマイ(カタツムリ)の曲がりくねった殻に頭を突っ込み、中身(部)だけを食することに適した形態をしています。この頭部と胸部が極端に細長い形態は、世界中のオサムシを見ても、特殊な形です。また、独特な名前をしていますが、マイマイ(カタツムリ)に頭を被って(突っ込んで)、食べている姿から付けられたようです。日本中に分布しながらも、地域によってたくさんの亜種に分けられているマイマイカブリは、「いつ亜種として分かれたか」など遺伝子の研究も行われています。



▲ マイマイカブリ

### V. 終わりに

オサムシたちの多くはマイマイカブリと同様に島国の日本において独自に進化しており、現在では草原や森林、高山、湿地、河原など日本中の多様な環境に適応しています。森林の大規模な伐採や湿地の乾燥化、河川敷の整備工事などによってこれらの環境がなくなってしまうと、オサムシたちは消えてしまいます。特徴のひとつ、「飛べない」ことで生息地の環境が悪化しても、遠くへ逃げたり、新しい環境へ移動することが難しい可能性が高いのです。日本の絶滅の危機に瀕している野生生物が記されている「レッドデータブック」には、すでに6種のオサムシたちが記されています。また、オサムシに非常に近い仲間の飛べない昆虫の中にも、開発などによって生息場所がなくなり、絶滅してしまう可能性がとても高いものがあります。しかし、これら昆虫は、絶滅しないように地域や企業、専門家によって保護活動が行われています。

あまり目立たない昆虫ですが、世界中のどこを探しても、この日本にしか生息していないオサムシたちがいつまでも多様な環境の中で見られるように願っています。

(あさくら かずのり)



▲ オオルリオサムシ

参考文献  
石川良輔(1991). オサムシを分ける錠と鍵. 株式会社八坂書房.  
八尋克郎(2008). オサムシー飛ぶことを忘れた虫の魅惑ー. 株式会社八坂書房.  
環境省自然環境局野生生物課(編)(2006). 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック- 5 昆虫類. 財団法人自然環境研究センター.